

「十字架につける」

ヨハネの福音書 18:39～19:16

はじめに

ユダヤ人の指導者たちは、ローマ総督ピラトのもとに、イエシュアを死刑にするように申し立てましたが、ピラトはイエシュアについて、死刑にあたるような罪はおろか、何の罪も認められないことを告げます。またマタイやマルコの福音書によれば、ピラトが最初からあることに気づいていたことが解ります。

【新改訳改訂第3版】

マルコ

15:10 ピラトは、祭司長たちが、ねたみからイエスを引き渡したことに、気づいていたからである。

そのような訳で、ピラトはイエシュアを釈放しようとしています。

1. 強盗バラバ

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

18:39 しかし、過越の祭りに、私があなたがたのためにひとりの者を釈放するのがならわしになっています。それで、あなたがたのために、ユダヤ人の王を釈放することにしましょうか。」

「ひとりの者を釈放する」、本来の過ぎ越しの祭りにはこのような「ならわし」はありません。ましてやそれがローマ総督の権限で行われるなどあり得ません。むしろその逆で、血が流されること、殺されることが本来の過ぎ越しの祭りに示される行為です。

【新改訳改訂第3版】

出エジプト記

12:21 そこで、モーセはイスラエルの長老たちをみな呼び寄せて言った。「あなたがたの家族のために羊を、ためらうことなく、取り、**過越のいけにえ**としてほふりなさい。

12:22 ヒソブの一束を取って、鉢の中の血に浸し、その鉢の中の血をかもいと二本の門柱につけなさい。朝まで、だれも家の戸口から外に出てはならない。

12:23 【主】がエジプトを打つために行き巡られ、かもいと二本の門柱にある血をご覧になれば、【主】はその戸口を過ぎ越され、滅ぼす者があなたがたの家に入って、打つことがないようにされる。

12:24 あなたがたはこのことを、あなたとあなたの子孫のためのおきてとして、永遠に守りなさい。

12:25 また、【主】が約束どおりに与えてくださる地に入るとき、あなたがたはこの儀式を守りなさい。

12:26 あなたがたの子どもたちが『この儀式はどういう意味ですか』と言ったとき、

12:27 あなたがたはこう答えなさい。『それは【主】への**過越のいけにえ**だ。主がエジプトを打ったとき、

主はエジプトにいたイスラエル人の家を過ぎ越され、私たちの家々を救ってくださったのだ。』すると民はひざまずいて、礼拝した。

このように、過ぎ越しの祭りとは「ひとりの者を釈放する」祭りではなく、「ひとりの者」がイスラエル人の家々の救いのために身代わりに殺される、その犠牲の血が流されることを示す祭りなのです。それはもちろん神の小羊と呼ばれたイエシュアの十字架の死を指し示しています。

18:40 すると彼らはみな、また大声をあげて、「この人ではない。バラバだ」と言った。このバラバは強盗であった。

バラバ、この人物の存在にどのような意味があるのでしょうか。バラバ(בֶּרֶבֶב)はヘブル語で表記すると「父の子」という意味があると考えられます。そしてこの「バラバは強盗であった」とあります。日本語で強盗と聞くと盗むイメージが強いですが、ヘブル語ではショーデード(שׂוֹדֵד)と言い、シャーダド(שָׂדָד)という動詞からできた言葉です。このシャーダドには「踏みにじられる、殺される」という意味があります。最初の言及の法則に従って、このシャーダドが聖書で最初に使われた記述からその意味をさらに深く調べてみますと、士師記 5:26 にそのヒントがあります。

【新改訳改訂第3版】

士師記

5:26 ヤエルは鉄のくいを手にし、右手に職人の槌をかざし、シセラを打って、その頭に打ち込み、こめかみを砕いて刺し通した。

5:27 ヤエルの足もとに彼はひざをつき、倒れて、横たわった。その足もとにひざをつき、倒れた。ひざをついた所で、**打ち殺された。**

この記述はイスラエルにまだ王がなくさばきつかさ、士師によって治められていた時代、イスラエルに侵略して来たヤビンの將軍シセラが、預言者デボラとバラクに敗れ、ヤエルという女性の足元にひざをつき、鉄の杭を打ち込まれて殺された出来事を歌った歌の一節です。軍隊の頭である將軍が、一人の女性の前にひざまずき、そしてその女性の手によってシャーダド「打ち殺される」出来事に、シャーダド本来の意味があります。このようにシャーダドとは、ただ単に殺されるという意味だけではなく、屈辱的に、みじめに殺されることを指し示していると考えられます。ですからこの「バラバは強盗であった。」という記述の中には、「父の子は屈辱的に、みじめに殺される」という意味があると考えられます。まさにここから御父である神様の御子であるイエシュアの、屈辱的に踏みにじられ、みじめに殺される受難と十字架の苦しみの出来事が始まります。それがこのバラバという人物の、その存在によって表されていると考えられます。

2. むち打ち

19:1 そこで、ピラトはイエスを捕らえて、むち打ちにした。

ピラトはイエシュアをむち打ちにするように命じます。むち打たれる者とは家畜、奴隷、そして罪人です。罪のない御父がこのような目にあうのです。まさに屈辱的に踏みにじられる、みじめな状態です。また「むち」

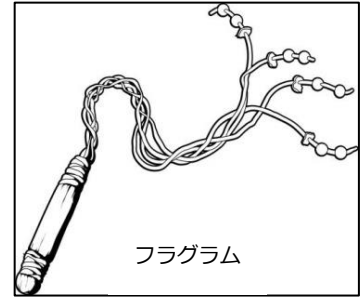
はヘブル語でショート(שוט)と言い、この言葉が聖書で初めて登場するのが I 列王記 12:11 です。

【新改訳改訂第3版】

I 列王記

12:11 私の父はおまえたちに重いくびきを負わせたが、私はおまえたちのくびきをもっと重くしよう。私の父はおまえたちをむちで懲らしめたが、私はさそりでおまえたちを懲らしめよう』と。」

この言葉は、ダビデの子ソロモンの子レハブアムが、王位継承の際にイスラエルの民に対して語った言葉です。この言葉をきっかけにイスラエルは北と南に分裂します。つまり国土が引き裂かれたのです。また実際にローマ兵が使用したイエシュアを打ったむちは「フラグラム」と言い、右図のようにむちの当たる部分に、獣の骨や金属の破片などが埋め込まれ、打つと同時に肉をズタズタに引き裂くことを目的とした物であったようです。ですからこのショートには「打つ」という意味だけでなく「引き裂く」という意味もこめられていると考えられます。またイエシュアは、最後の晩餐となった過ぎ越しの食事の席でこのように語っておられました。



【新改訳改訂第3版】

マタイ

26:26 また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福した後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」

イエシュアがパンを裂いたのは、みんなで分け合って食べるための便宜上の行為ではありません。イエシュアの肉体が、このむち打ちによって実際に引き裂かれることを意味していました。そしてその理由はイザヤ書に記されたこの預言が成就するためであったと考えられます。

【新改訳改訂第3版】

イザヤ

53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

このように、イエシュアがむち打たれたのは、私たちの罪が癒される、赦されることを示すためであったと考えられます。またこのむち、ショートは、「歩き回る、行き巡る、漕ぐ」という意味の動詞シュート(שוט)が語源になっていると考えられ、そのより深い意味が、最初に使われた民数記 11:8 にあります。

【新改訳改訂第3版】

民数記

11:8 人々は歩き回って、それを集め、ひき臼でひくか、臼について、これをなべで煮て、パン菓子を作っ

ていた。

この記述はイスラエルの民が、荒野で 40 年間マナを食べたことについての箇所ですが、ここでマナを集めるために「歩き回って」と訳されているのがシュートです。そして集められたマナは、臼でついて、すりつぶされました。その様子がむち打たれたイエシュアの姿と重ねることができます。まさにユダヤ人たちはシュート、「歩き回って」イエシュアを探し回り、そして捕らえてショート、むち打たせるように仕向けたのです。イエシュアはかつてこのマナを取り上げ、そしてご自分を指してこのように語っておられました。

【新改訳改訂第 3 版】

ヨハネ

6:48 わたしはいのちのパンです。

6:49 あなたがたの父祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。

6:50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。

6:51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」

このように、イエシュアはむち打たれることで、ご自分がマナに象徴される「天から下って来たパン」であり、それを食べる者、すなわち信じて受け入れる者は「死ぬことがない」ことをも示されたと考えられます。

3. いばらの冠

19:2 また、兵士たちは、いばらで冠を編んで、イエスの頭にかぶらせ、紫色の着物を着せた。

そしてイエシュアに対する屈辱的な、みじめな行為はさらに続きます。次はいばらの冠をかぶらされます。いばらはヘブル語でコーツ(קוצ)と言い、創世記 3:18 で初めて登場します。

【新改訳改訂第 3 版】

創世記

3:17 また、人に仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならぬ。

3:18 土地は、あなたのために、**いばら**とあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。

ここにはアダムが犯した罪により土地が呪われてしまった結果、いばら、コーツが生えてきたことが記されています。つまりコーツとは、地上の呪いを象徴する植物です。このいばらで冠が編まれました。冠とは王の象徴です。これをかぶらされることでイエシュアは世の罪のもたらす全ての呪いを一身に受ける王、代表となることが示されていると考えられます。またこのコーツは、クーツ(קוצ)「嫌う、いやがる」という動詞が語源であると考えられ、その本来の意味を調べるには、創世記 27:46 を見る必要があります。

創世記

27:46 リベカはイサクに言った。「私はヘテ人の娘たちのことで、生きているのがいやになりました。もしヤコブが、この地の娘たちで、このようなヘテ人の娘たちのうちから妻をめとったなら、私は何のために生きることになるのでしょうか。」

これはアブラハムの子イサクの妻リベカが、その息子であるエサウがヘテ人すなわち異邦人を妻としたことを嘆いている場面ですが、そこで「生きているのが『いやになりました』」と訳されているのが聖書で最初に使われたクーツです。このようにクーツには、イサクの息子エサウが異邦人ようになってしまったことに対する嘆きと、ヤコブすなわちイスラエルが、そのようにならないことを願う思いを指し示していると考えられます。「生きているのがクーツ、いやになりました。」という表現はまさに十字架によって自らのいのちを捨てようとするイエシュアの姿につながります。このようにいばら、クーツの動詞形であるクーツにはイスラエルのためにいのちを捨てるという意味があると考えられます。それをイエシュアは冠として頭にかぶられました。頭は思考を司る器官です。イエシュアはこの受難をただ受け入れたのではなく、自らの意思と考えをもって臨まれたことが示されていると考えられます。

4. 紫色の服

そしてイエシュアは紫色の着物を着せられました。紫色はヘブル語でアルガーマーン(אַרְגָּמָן)と言い、初めて使われた箇所は出エジプト記 25:4 です。

【新改訳改訂第3版】

出エジプト

25:1 【主】はモーセに告げて仰せられた。

25:2 「わたしに奉納物をささげるように、イスラエル人に告げよ。すべて、心から進んでささげる人から、わたしへの奉納物を受け取らなければならない。

25:3 彼らから受けてよい奉納物は次のものである。金、銀、青銅、

25:4 青色、**紫色**、緋色の撚り糸、亜麻布、やぎの毛…

25:8 彼らがわたしのために聖所を造るなら、わたしは彼らの中に住む。



これは「モーセの幕屋」が建てられる際に、その材料としてイスラエルの民が神にささげ、神様が受け取られた品々のリストです。つまりアルガーマーン、「紫色」は聖所のために「神様が人とともに住む」ためにささげられるものなのです。「モーセの幕屋」に使用された色は紫の他に青、緋色、そして亜麻布の白がありますが青は(תְּכֵלֶת)と言い、紫とも訳されることがあります。

イエシュアが亜麻布の服をまとい、全身から赤い血すなわち緋色を流し出していたら、これに紫色の服を着せれば、この時のイエシュアの姿は「モーセの幕屋」を表していたと考えられます。イエシュアの十字架はまさに「モーセの幕屋」に示された神様と人がともに住む「神様の国、御国」の完成の

ために、神様にささげられた行為であったということが示されていると考えられます。

ちなみにアルガーマーンという綴りの中にラーガム(ῥαγμα)という動詞を見つけることができます。ラーガムとはなんと「(石打ちで) 殺す」という意味です。イスラエルにとっての死刑は石打ちです。たしかにイエシュアは十字架刑によって殺されるのですが、ユダヤ人の指導者たちの策略によって殺される訳ですから、意味合いとしては石打ちと変わりません。現にイエシュアは何度か石打ちにされそうな目にあっています。このように紫色、アルガーマーンの服には、ユダヤ人によって殺される、ユダヤ人による死刑という意味があるとも考えられます。

このようにイエシュアがむち打たれたこと、いばらの冠や紫色の服を着せられたことは、人の側がその勝手な意思によってなされたことではなく、むしろ神様のご意思によって、そのご計画を指し示すしとして、神様が敢えてお定めになった行為であったと考えられます。

5. 権威

19:3 彼らは、イエスに近寄っては、「ユダヤ人の王さま。ばんざい」と言い、またイエスの顔を平手で打った。

冒頭で述べた、「バラバは強盗であった」という記述に示された、御子イエシュアが受ける屈辱的な出来事がここにも描かれています。

19:4 ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。「よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の罪も見られないということを、あなたがたに知らせるためです。」

19:5 それでイエスは、いばらの冠と紫色の着物を着けて、出て来られた。するとピラトは彼らに「さあ、この人です」と言った。

ピラトがユダヤ人たちに対して、イエシュアの無罪を主張するのはこれで二度目です。いばらの冠と激しいむち打ちにより、イエシュアの全身は血まみれになっていたことでしょうか。しかしこれだけの仕打ちを目にしてもユダヤ人たちの気持ちは静まりません。

19:6 祭司長たちや役人たちはイエスを見ると、激しく叫んで、「十字架につけろ。十字架につけろ」と言った。ピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。」

ピラトは三たびユダヤ人たちに対してイエシュアの無罪を主張します。しかしその声はユダヤ人たちの激しい叫びに打ち消されます。「十字架につけろ、十字架につけろ」、これはもはや法的な訴えや要求と言えるものではなく、ユダヤ人たちがピラトに命令しているようです。そこでピラトは言い返します。そんなに十字架につけたいのなら自分たちですればいいと。しかし前回のヨハネ 18:31 にあったように、ユダヤ人たちには死刑を行う権限がありません。ユダヤ人を治めているはずのローマ総督であるはずのピラトが、正しい主張をしているはずの彼が、いつの間にか追い詰められていきます。そしてこの不可思議な状況に、ピラトは次第に恐れを抱き始めます。

19:7 ユダヤ人たちは彼に答えた。「私たちには律法があります。この人は自分を神の子としたのですから、律法によれば、死に当たります。」

19:8 ピラトは、このことばを聞くと、ますます恐れた。

「神の子」、この言葉にピラトの恐れはますます大きなものとなります。自分をユダヤ人の王であるだけでなく、神の子と言うこのイエシュアという人物は一体何者なのだろうと。そしてそのイエシュアを十字架につけるよう激しく要求するこのユダヤ人たち。一体これは何だ、何が起ころうとしているのだというような恐れがピラトの心を覆っていたと思われます。この場で最高の権力を持った立場にいるはずの自分が、状況を全く把握できずにいるばかりか、その権力さえも行使できないこの状況を何とか打開しようとピラトは再びイエシュアに尋問します。

19:9 そして、また官邸に入って、イエスに言った。「あなたはどこの人ですか。」しかし、イエスは彼に何の答えもされなかった。

「あなたはどこの人ですか。」ピラトのこの尋問に対し、イエシュアは沈黙をもって応えます。まるで全てを理解しているかのようなイエシュアの態度に、ピラトの恐れと困惑はさらに強まります。

19:10 そこで、ピラトはイエスに言った。「あなたは私に話さないのですか。私にはあなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのですか。」

しかしもはやピラトにはイエシュアを釈放する権威はありませんでした。三度も無罪判決を下したにも関わらず、それが通らなかったからです。確かに十字架につける権威はあったでしょう。しかしそれは自分の意思で行うものではありませんでした。ですからイエシュアはピラトに対してこう言われます。「あなたはわたしに対して何の権威もない」と。

19:11 イエスは答えられた。「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに渡した者に、もっと大きい罪があるのです。」

イエシュアはピラトが非常に恐れていることを理解しておられました。そしてその恐れとは、間違った判決を下し、ローマ総督として失敗する、罪を犯すことへの恐れであることを理解しておられました。ですから「わたしをあなたに渡した者」すなわちユダヤ人たちに「もっと大きい罪がある」と言われたのだと考えられます。イエシュアの十字架刑とは、ローマ総督の権限のもとで行われるものではなく、「上から」すなわち神様の権限において、ユダヤ人たちの罪のゆえに行われるものであることが示されていると考えられます。

このようにイエシュアがユダヤ人たちのようではなく、ましてや罪人のようでもなく、まさに王のように、神の子のように、権威ある者のように話される様子にピラトはさぞ驚いたことでしょう。

6. ピラト

19:12 こういうわけで、ピラトはイエスを釈放しようと努力した。しかし、ユダヤ人たちは激しく叫んで言った。「もしこの人を釈放するなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王だとする者はすべて、

カイザルにそむくのです。」

「あなたはカイザルの味方ではない」この言葉がピラトの意志を一気に弱らせます。つまりローマ皇帝カイザルに反逆するものだということです。ピラトの持つ権威は、このカイザルから与えられているものなのです。ピラトにとってこのカイザルに背くことは完全な自殺行為、絶対にあってはならないことなのです。「ピラトはカイザルにそむく者だ」というような全くのデタラメであったとしても、そんな噂がカイザルの耳に少し入るだけでもどうなるかわからない、ピラトの立場は一気に危うくなる可能性があるのです。訴えられているのはイエシュアであったはずなのに、いつの間にか自分にも矛先が向けられていることにピラトは気づいたことでしょう。そして自分に与えられている権威がいかに危うい、弱く脆いものであることを痛感したことでしょう。先ほどイエシュアが言われたとおりです。「上から与えられているのでなかったら、あなたには何の権威もありません。」ということです。

19:13 そこでピラトは、これらのことばを聞いたとき、イエスを外に引き出し、敷石(ヘブル語ではガバタ)と呼ばれる場所で、裁判の席に着いた。

もはやイエシュアの判決に関する一切の権威をピラトは失っていました。「裁判の席に着いた」とありますが、もはやイエシュアの有罪判決および十字架刑は決定したのです。敷石、ガバタ(ガブター)(גַבְטָא)という言葉はガーヴァ(גַּרְוּא)「高ぶる」という意味の動詞が語源になっていると考えられます。もはや何の権威もないピラトでしたが、それでもローマ総督としてのプライドを持って高くあろう、高ぶろうとしたことが表されていると考えられます。

19:14 その日は過ぎ越の備え日で、時は第六時ごろであった。ピラトはユダヤ人たちに言った。「さあ、あなたがたの王です。」

時は過ぎ越しの祭りの備えの日でした。「第六時」は正午、つまり午後 12 時のことです。ちょうどこの時、神殿では過ぎ越しの小羊のいけにえがささげられ始めます。イエシュアの十字架は、これと同時進行で行われたのです。つまり筆者であるヨハネは、イエシュアの十字架が、過ぎ越しの小羊であることを強調しているのです。一方ピラトは、イエシュアが「あなたがたの王」つまりユダヤ人の王であることを強調し、以後もこれにこだわり続け、これに関してだけは一步も譲りません。

19:15 彼らは激しく叫んだ。「除け。除け。十字架につけろ。」ピラトは彼らに言った。「あなたがたの王を私が十字架につけるのですか。」祭司長たちは答えた。「カイザルのほかには、私たちに王はありません。」

「カイザル以外に王はない」、祭司が言う言葉でしょうか。しかしピラトはこれについては断固として「あなたがたの王」イエシュアはユダヤ人の王であると告げます。これでは全くあべこべです。

19:16 そこでピラトは、そのとき、イエスを、十字架につけるため彼らに引き渡した。

平行記事のマタイ 27 章では、ピラトはユダヤ人たちの前で水で手を洗って見せて、この件に関しては自分には責任がないことを表明したことが描かれていますが、このヨハネの福音書ではあくまでも「ピラトが十字架に引き渡した」つまりピラトを通して、ピラトによって十字架につけたことが強調されています。その理由はピラトの名前が、ヘブル語の視点で見ると一つのメッセージを持っているからだと考えられます。実はピラト(פִּלָּטוֹס)という名前にはパーラト(פָּרָא)訳すと「救う」という言葉が隠されているのです。たしかにピラト

はイエシュアを釈放する、つまり「救う」ことはできませんでした。ユダヤ人たちの激しい叫びと脅しの前に屈した結果となった敗北、失敗でした。しかしそのおかげで、イエシュアを十字架につけることで、罪の贖い
がなされ、それを信じ受け入れる全ての人を永遠の滅びから「救う」ことができるようになったのです。この
ように、神様のご計画とは人の権力や能力による成功の上に建てられるものではなく、人の失敗、愚かさ、罪
を用いるかのような形で建てられていくものであると言えます。それは全ての栄光が、ただ神様にのみ帰され
るためです。